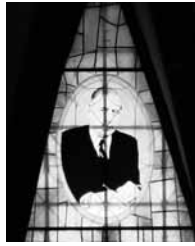


コンゴ王国のキリスト教化 ②

コンゴ共和国の首都中心部にあるセント・アンヌ教会は、フランスの植民地統治下のブラザビルが「自由フランス」の拠点となっていた1943年に建設された。90年代の内戦で大きな被害を受けたが、2011年3月25日、大統領夫妻が出席するなか、竣工式が盛大に行われた。教会内部には自由フランスの代表だったシャルル・ド・ゴールの顔のステンドグラスが新たに取り付けられた。フランス本国では革命以来、政教分離の歴史を刻んでいく一方で、アフリカなどの植民地の統治においては、宗教がさまざまな面で重要な役割を果たしてきた。



シャルル・ド・ゴールのステンドグラス

サハラ以南の王国のなかで、他の地域に先駆けてキリスト教化を推進したコンゴ王国では、後継者争いにも宗教が大きく関与している。その原因は、急速なキリスト教化によって伝統社会との軋轢が生じたことだ。とりわけキリスト教の推進派であり、自らも洗礼を受けアルフォンソと改名した国王の長男と、彼に反対する次男のムバンズ・ア・ンジンガとの対立が決定的となっていた。

キリスト教化と伝統社会の衝突は、先祖を祀る偶像を燃やされたり、呪術を禁止されたりしたことなどによるが、反キリスト教派が最も問題にした点は、一夫多妻制を禁じられたことだった。それは「この国の最も尊重すべき制度」への侵害であるとされ、コンゴの伝統的社会的秩序をも乱すものと糾弾された。一夫多妻制によって妻の家事の負担が軽減されているという観点から、女性たちからも支持があったようである。

性急なキリスト教化を危惧するムバンズは、兄の勢力を弱めるためにさまざまな工作をした。国王である父に対し、「兄が王の座を狙っている」「ポルトガル人僧侶が魔術によって河を干上がらせ、収穫が少なくなっている」などと耳打ちしたりした。こうしたことが功を奏して、国王はキリスト教の廃止を決定し、息子のアルフォンソとともに首都にいたポルトガル人をコンゴ河岸のンスンディというところに追放した。

この王の決定に対してポルトガル王国が、どのような反応を示したかは定かではない。コンゴとの交流に積極的だったポルトガル国王は既に亡くなっていて、その後を継いだ国王はインド航路の発見を急いでいたので、コンゴ王国の動きに大きな関心を払っていなかったようだ。とくに、競って大洋に乗り出していた隣のスペイン王国が、1493年にコロンブスによって西回り航路でアメリカ大陸に到達したニュースは、ポルトガルにとって衝撃的だった。新大陸の開発に遅れてはならないと焦るポルトガルの関心は、アフリカよりもそちらに移っていった。

国王である父親によって追放されたアルフォンソは、キリスト教の信仰を捨てることはなかった。それまでの伝統的な呪術を廃し、ミサを連日のように行ったという。また、ポルトガル王国との友好関係も変わることなく続いていたようである。

ところで、王国内のキリスト教化を推進したアルフォンソ自身の信仰はどのようなものであったのか？ 教育に重点をおき、キリスト教化を進めるために、400人収容できるミッションスクールを建て、そこには女生徒も含まれていた。また、ポルトガル僧侶がポルトガル王に宛てた書簡には次のように記されている。

彼のキリスト教徒としての振舞いは、あたかも彼が人間ではなく、この国を改宗せしめんがために主が送ったもうた天使のように思える。

彼は私どもよりはるかによく、預言者たちのこと、我らが主イエス・キリストの福音書のこと、聖者たちのあらゆる生涯のこと、我らの母なる聖教会についてのあらゆることどもを心得ております。

首都から追放されたアルフォンソに転機が訪れたのが、父である国王の死だった。その知らせは、首都に残された彼の実母から秘密裏にもたらされた。彼は、亡き国王の第一夫人でもあった母の協力を得て、密かに首都へ戻ることができた。母親はその時間を稼ぐために、国王の死の公表を3日遅らせた。

首都に戻ったアルフォンソは、王国内に父親の死を伝え、自らが王位に就くことを宣言した。そして、父親の葬儀をキリスト教式で盛大に行った。亡くなった国王はその晩年、次男の工作によって背教者となってしまったが、その葬儀を逆にキリスト教で行うことによって彼の名誉を回復させた。そしてそれは同時にアルフォンソ自身の王位継承の正当性を王国内やポルトガルに認めさせることとなったのである。

弟のムバンズがこの動きに異を唱えたのは言うまでもない。大群を集めて兄との全面対決になった。記録によれば、弟派の軍が20万人に対し、兄側は1万人程度だった。数的には兄にとって圧倒的不利な条件だったが、戦いは兄側の大勝利に終わった。この勝利はキリスト教を信じることによる「奇跡」とされ、コンゴ王国における新国王の立場は強固となり、その彼が推進するキリスト教はより盤石な布教伝道の態勢を得たことになる。

為政者が統治のために宗教を利用することは、洋の東西を問わず歴史のなかでよくある。文頭の教会内に取り付けられたシャルル・ド・ゴールのステンドグラスも、そうした点で同一線上にあるのかもしれない。宗教の後ろ盾を得ることによって、為政者は自らの正当性を認知させたり、より優れた技術、とくに武器などを調達することによって、より強固な統治を可能にさせたりする。兄弟対決において数的に劣勢の兄が大勝した陰には、「先進国」であったポルトガルから持ち込まれていた火器の存在が大きかったと言われている。

その火器はまた、近隣の王国との戦いに勝利して領土を拡大していったコンゴ王国にとって、大いに役立ったことだろう。アフリカではこうした戦いのなかで、勝者が敗者を奴隷にすることはしばしばあった。つまり、ポルトガル王国がコンゴ王国と交流を持ったとき、より大きな観点に立つなら、ヨーロッパがアフリカと遭遇したとき、アフリカ大陸には奴隷という「商品」がすでに存在していたとも言える。新大陸発見によって労働者需要が増大し、王国内の奴隷の存在も重要視されていく。奴隷貿易が盛んになっていくなかで、コンゴ王国内での奴隷狩りにも拍車がかかり、やがてそれによって王国が衰退していくという皮肉な歴史をたどるのである。

[参考文献]

ピーター・フォーバス『コンゴ河—その発見、探検、開発の物語—』田中昌太郎訳、草思社、1989年。

Souka SOUKA, CONGO, DU ROYAUME À LA RÉPUBLIQUE, L'HARMATTAN, 2012